第六章　浮舟と薫の物語　薫、浮舟を伴って宇治へ行く

［第一段　薫、宇治の御堂を見に出かける］

かの大将殿は(その当の薫大将殿は)、例の、秋深くなりゆくころ、ならひにしことなれば(例年、晩秋の常として)、寝覚め寝覚めにもの忘れせず(寝覚めの度に忘れもせずに)、あはれにのみおぼえたまひければ(宇治姉君がしみじみと思い出されなさるので)、「*宇治の御堂造り果てつ(宇治の御礼拝堂が造り終わりました)」と聞きたまふに(とお聞きになって)、みづからおはしましたり(自ら山寺にお出掛けなさいました)。　*「うぢのみだうつくりはてつ」は注に＜故八宮の寝殿を解体して阿闍梨の山寺の御堂に造り変えて寄進した。「宿木」巻（第七章第二段）に語られている。＞とある。

久しう見たまはざりつるに(久しく宇治の景色を見ていらっしゃらなかったので)、山の紅葉もめづらしうおぼゆ(山の紅葉も珍しく思えます)。こぼちし寝殿(山寺に御堂として移築する為に解体した寝殿跡地に)、こたみはいと晴れ晴れしう造りなしたり(今回新築した寝殿はとても壮麗な装飾が施されています)。昔いとことそぎて(昔の山荘がとても質素で)、聖だちたまへりし住まひを思ひ出づるに(故八宮が修行僧然と暮らしていらっしゃった様子が思い出されて)、この宮も恋しうおぼえたまひて(大将は以前の寝殿が懐かしく思われなさって)、さま変へてけるも(建て替えてしまった事も)、口惜しきまで(残念と)、常よりも眺めたまふ(いつになく感傷に耽りなさいます)。

*もとありし御しつらひは(以前の寝殿の御使い方は)、いと尊げにて(仏間本意で)、*今片つ方を女しくこまやかになど(もう半分を姫たちの部屋として細々とした調度類を置いて)、一方ならざりしを(一様ではなかったが)、*網代屏風何かのあらあらしきなどは(網代屏風のような簡素な衝立などは)、かの御堂の僧坊の具に(山寺の御堂の僧房用の道具として)、ことさらになさせたまへり(わざわざ運んで使わせなさいました)。山里めきたる具どもを(新築の寝殿には山荘に相応しい風情の調度類を)、ことさらにせさせたまひて(新たに作らせなさって)、いたうもことそがず(あまり質素にせず)、いときよげにゆゑゆゑしくしつらはれたり(とても整然と上品に設置されていました)。　*「もとありしおおんしつらひ」は注に＜元の建物は寝殿の西面と母屋が仏間で西廂間が八宮の居間であった。「椎本」巻に語られている。＞とある。だから、「いとたふとげ」というのは＜尊く仏を祭っていた＝仏間本意だった＞ということなのだろう。 *「いまかたつかたををんなしく」は注に＜寝殿の東廂間が姫君たちの部屋であった。＞とある。 *「あじろびゃうぶ」は、今だと籐製が多い編木細工の簡素な衝立のことなのだろう。

遣水のほとりなる岩に居たまひて(薫殿は流水のほとりにある岩に座って、こうお詠みになります)、

「絶え果てぬ清水になどか、亡き人の面影をだにとどめざりけむ」（和歌 50-07）

「変わらずに 流れる水に 移る影」（意訳 50-07）

*「絶え果てぬ」は＜以前のまま変わらずに残っている＞という意味なんだろう。だから、「しみづになどか」は＜私は清水に如何して＞ではなく＜清水は如何してその水面に＞と、昔のまま残っている遣水を懐かしがって＜せめて姉君の面影だけでも留めてくれなかったのか＞と愚痴っている、という趣きの歌詠みらしい。が、水面に映る物は水

辺に在る物だけで、無い物は映らないし、思い出の物が在ると悲しいからと言って寝殿を山寺へ移築したのは薫殿自身だ。いや、戯れ言は承知の上での酔狂だろうが、むしろその情緒だけなのかが気になる。何か語用に洒落や含みでもあるのではないか。といっても、私には何も分からないが、これが座興だけだとしたら、然して特に気が利いた場面とも思えないからだ。

涙を拭ひて(やがて大将は涙を拭って)、弁の尼君の方に立ち寄りたまへれば(弁の尼君の部屋に立ち寄りなさると)、*いと悲しと見たてまつるに(弁尼は薫大将の久しぶりの御来訪をとても懐かしく思い申して)、ただひそみにひそむ(嬉し涙に暮れます)。長押にかりそめに居たまひて(薫殿は母屋の上がり口に腰掛けなさって)、簾のつま引き上げて(簾の端を捲り上げて)、物語したまふ(お話し為さいます)。几帳に隠ろへて居たり(弁尼は几帳の後ろに隠れて座っていました)。ことのついでに(薫大将は御堂の完成や山荘の変わり映えなどの話題の他に)、　*「いと悲しと見たてまつる」は敬語遣いからして、弁尼が薫大将を「かなし」と思う、ということだろうから、この「かなし」は久しぶりの薫殿の訪問に＜嬉しい＞ということ、と読んで置く。

「かの人は(例の故姉君の異母妹は)、さいつころ宮にと聞きしを(つい最近に二条院に来ていると聞きましたが)、さすがにうひうひしくおぼえてこそ(さすがに私はその娘御とは余所余所しい間柄なので)、訪れ寄らね(訪ねて行けません)。なほ、これより伝へ果てたまへ(ぜひ、あなたから私が会いたがっていると、よく伝えて下さい)」

とのたまへば(と仰ると)、

「一日、かの母君の文はべりき(先日、その母君から手紙がありました)。*忌違ふとて(物忌み謹慎の場所柄選びで)、ここかしこになむあくがれたまふめる(あちらこちらと転居なさっているようです)。このころも(最近も)、あやしき*小家に隠ろへものしたまふめるも心苦しく(間に合わせの小さな家に隠れ住んでいらっしゃるのも心苦しいので)、すこし近きほどならましかば(此処がもう少し近かったなら)、そこにも渡して心やすかるべきを(移らせて安心できるものを)、荒ましき山道に、たはやすくもえ思ひ立たでなむ(険しい山道なので容易には思い立てない)、とはべりし(とございました)」　*「いみたがふとて」は注に＜方違いをするといって。＞とある。今から見れば、よくもこんな見え透いた方便が通用したものだ、という気もするが、病を呪い祈祷で払う時代にあっては、平素はともかく、何か問題がある場合に、こういう呪い事の説得力は絶大だったのかも知れない。が、それと同時に、当時から、この呪い事を方便に上手く利用していた向きがあったことは、この物語でも再三語られている。視覚情報で多くの状況認識を得るヒトにあって、闇への恐怖は大きく、また恐怖心を利用した仕掛けの効果も高い、のだろう。　*「小家」は「こいへ」と読みがあり＜小さな家。粗末な家。＞と古語辞典にある。古語辞典でわざわざ＜小さな家＞と説明されるのも変なほど「小家」が＜小さな家＞であろうことは察しが付くが、逆に、「こいへ」という言い方が現代語には、少なくも一般的な日用語用としては、引き継がれていないことが興味深い。因みに、「いへ」は＜居辺(ゐへ、居る所)＞ではなく＜入辺・往辺(いへ、帰る所)＞なので、本拠地という語感だろうから、一時性を示す「こ」という語との相性は悪いような気はする。だから、「小家」を「しょうか」と音読みして＜小さな門＞の意味に語用しがちなのではないか。ただの思い付きだし、全くの余談だが、「こいへ」は妙に引っ掛かる語感だ。

と聞こゆ(と弁尼は申します)。

「人びとのかく恐ろしくすめる道に(みんなが恐ろしがっているような山道に)、*まろこそ古りがたく分け来れ(この私は相変わらず分け入ってきたわけだ)。何ばかりの契りにかと思ふは(どんなに深い縁だったのかと思えば)、あはれになむ(感慨深い)」　*「まろ」は＜親しい間で用いる一人称＞と注にある。少なくも、目上には使えないような語感。

とて、例の、涙ぐみたまへり(と言って大将はまた涙ぐみなさいました)。

「さらば(では)、*その心やすからむ所に(その小家という気兼ねの無さそうな所に)、消息したまへ(私の意向を伝えて下さい)。*みづからやは、かしこに出でたまはぬ(あなた御自身で、其方にお出かけにはなれませんか)」　*「その心やすからむ所(気安そうな所)」は、弁が「小家」と言ったことから察せられる語感なのだろう。　*「みづからやは」は注に＜弁尼自身で、の意。「やは」疑問、依頼の意。＞とある。

とのたまへば(と大将が仰ると)、

「仰せ言を伝へはべらむことはやすし(お言葉を手紙で伝え申すことは承ります)。今さらに京を見はべらむことはもの憂くて(今さら都を訪ねますのは億劫で)、宮にだにえ参らぬを(姫君のいらっしゃる二条院にさえ参っておりませんものを)」

と聞こゆ(と弁尼は申します)。

[第二段　薫、弁の尼に依頼して出る]

「などてか(どうしてそんな出不精な)。ともかくも(何かと)、人の聞き伝へばこそあらめ(世間がうるさいならともかく)、*愛宕の聖だに(愛宕山の修験僧でさえ)、*時に従ひては出でずやはありける(時によっては町に出ない事があろうか)。*深き契りを破りて(世俗を断つという出家時の深い誓いを破ってまで)、人の願ひを満てたまはむこそ尊からめ(世人の幸いに資してこそ尊い修行姿勢と言えるでしょう)」　*「あたごのひじり」は愛宕山の修験僧のことらしい。愛宕山(あたごやま)は＜京都市右京区にある山。標高 924 メートル。東の比叡山(ひえいざん)と相対する。山頂に愛宕神社がある。あたごさん。＞と大辞泉にある。「あたご」という音の地名か物名が先にあって、それに「愛宕」の漢字を当てたらしいが、「あたご」の語源も、「愛」と「宕」を何故当てたのかも、私がざっと調べた限りでは不明だ。また、私のような東京者にとっては、愛宕山といえば芝の NHK 博物館がある小山が馴染み深いが、京都人にとっては、智の叡山に対して霊験の愛宕山、みたいな観念があるのかも知れない。そんな風に聞こえる此処の言い回しだ。　*「時に従ひて」が何を意味するのか、具体意はないのかも知れないが、俗人に食べ物を乞う托鉢も信者供養および布教に資する修行だ、との説明をどこかで聞いたような気もする。タイの仏教僧のテレビ取材だったか、また、それが高野聖の話に通じるものだったような。それに、下文の「人の願ひを満てたまはむ」も＜托鉢が布施した人の供養になる＞ということと繋がるようにも見える。　*「深き契りを破りて」は出家僧が世俗を離れる誓いを立てて修行に入ることを言っている、のだろう。

とのたまへば(と薫殿が仰ると)、

「*人渡すこともはべらぬに(得も無い私のような尼僧には)、聞きにくきこともこそ(余計なでしゃばりとの、厭な悪口も)、*出でまうで来れ(出て参りましょうに)」　*「ひとわたす」は、人が容

易に行き来出来ない場所と場所との間を橋などの施設や舟などの用具といった手段で結んで往来の用に供すること、を言うようだ。注には＜以下「出でまうで来れ」まで、弁尼の心中の思い。『異本紫明抄』は「人わたすことだになきを何しかも長柄の橋と身のなりぬらむ」（後撰集雑一、一一一七、七条后）を指摘。「人渡す」は衆生済度の和訳。＞とある。「衆生済度（しゅじゃうさいど）」は＜仏語。迷いの苦しみから衆生を救って、悟りの世界に渡し導くこと。＞と大辞泉にある。「人わたすことだになきを」は＜人を救えるほどの徳ある説法が出来ないのに＞くらいの言い方だろうか。「何しかも」は＜一体何を以てして＞。「長柄の橋（ながらのはし）」は＜長柄あたりにあった橋。現在の長柄橋付近にあったといわれる。［歌枕］＞と大辞泉にある。難波宮付近にあった橋らしく、「長柄の橋と身のなりぬらむ」は＜都に出る橋を渡る立場になってしまう＞ということと、「ながら」を＜生き永らえる→年老いた＞に洒落て＜老醜を曝してしまう＞とも言っていて、「何しかも」が＜如何してそんなことをしなければならないのか→したくない＞という言い方になっているのだろう。　*「いでまうでくれ」は「いでまうでく（出て来る、の丁寧語）」の已然形で、仮定構文＝可能推量を示す言い方、なのだろう。下に＜ば、あいなし＞などが省かれているのかも知れない。

と、苦しげに思ひたれど（と弁尼は厄介に思ったが）、

「なほ、よき折なるを（やはり、今が良い機会なので）」

と、例ならずしひて（と薫殿はいつになく強引に）、

「明後日ばかり、車たてまつらむ（明後日に車を差し向け申します）。その旅の所*尋ねおきたまへ（その常陸姫の仮宿の場所を教えて置いて下さい）。ゆめをこがましうひがわざすまじきを（其処を知ったからと言って、私は決して夜這いなどのバカなマネはしませんから）」　*「たづねおく」は＜調べて置く＞という語用が多いらしいが、此処では車を手配する都合上、行く先を＜知らせて置く＞という言い方かと思う。

と、ほほ笑みてのたまへば（と軽口めかして微笑んで仰ると）、わづらはしく（弁尼は面倒が懸念されて）、「いかに思すことならむ（どうしようと御考えなのか）」と思へど（と思うが）、「奥なくあはあはしからぬ御心ざまなれば（大将は無遠慮な軽薄な人ではない御人柄なので）、おのづからわが御ためにも（当然に内親王の婿たる御自身の立場のためにも）、人聞きなどは包みたまふらむ（この老尼の出しゃ張りも含めて、浮気が露見する外聞の悪さには注意なさるだろう）」と思ひて（と思って）、

「さらば、承りぬ（それでは私が出向くことに致します）。*近きほどにこそ（常陸守の三条邸は御住まいの三条宮邸から近いのですから）、*御文などを見せさせたまへかし（御手紙で私を差し向けるという事情を、どうか知らせなさって置いて下さい）。*ふりはへさかしらめきて（私の一存での出向きでは、あまりに出しゃ張りで）、*心しらひのやうに思はれはべらむも（御節介のように思われ申しますのも）、今さらに*伊賀専女にや（尼の身で、今さらに伊賀の世話焼き婆でもあるまい）、と慎ましくてなむ（と気が引けます）」　*「近きほどにこそ」は注に＜下に「おはすれ」などの語句が省略。浮舟は薫の三条宮邸の近くの隠れ家にいます、の意。＞とある。が、下に省略というよりは、この文節は下文を叙述する理由説明句として、読点で続ける構文と読む方が自然に文意が取れる。それに、むしろ恐らく上文に於いて、弁尼は薫殿に＜三条の何筋＞と実際の常陸姫の住所を教えたのであり、その具体地名を物語に明

記するのは憚られたので省略というよりは、本文としては伏せたのだろう。　*「御文などを見せさせたまへかし」は注に＜『完訳』は「前もって薫から浮舟に手紙を遣わしてほしいとする。尼の身で媒に積極的になりすぎるのを憚る」と注す。三条西家本には仮名で「おほむふみ」とある。＞とある。この弁尼の発言文全体の文意から見て、此処の言い方がそういう意味になる、という注だろうか。確かに分かり難い。というより、この発言文全体が私には文面からだけでは丸で分からない。発言文なのだから、場面状況を良く見て意味を取るしかないのだろうが、当時の実情が本当に分からない。ともあれ、「見せさす」は＜知らせる＞で、明後日は急なので、弁尼からも訪問する旨の手紙は出すのだろうが、大将からも事情を知らせて置いてくれ、ということらしい。「かし」は念押しの終助詞とのこと。　*「ふりはふ」は＜遠路、または困難な所を、わざわざ出かける。＞と古語辞典にある。此処では、殊更に自分ひとりが出張る、という意味なのだろう。　*「こころしらひ」は＜心遣い。気配り。配慮。＞でもあるが＜趣向。思い付き。＞でもあるようで、此処では＜一人合点→おせっかい＞という語用らしい。　*「伊賀専女」は「いがたうめ」と読みがある。「いがたうめ」は＜キツネの異名。人をたばかる仲人をキツネにたとえていう語。＞と古語辞典にある。たばかる－忍者－伊賀、という連想はあるが、「伊賀（京都から見て宇治の東奥の地名）」や「専女（老女）」と＜キツネ＞がどう結びつくのかは、ざっと調べた限りでは不明。

と聞こゆ（と申します）。

「文は（手紙で済ますのは）、やすかるべきを（手軽だが）、人のもの言ひ（其処に子細を記せば、誰の目に止まるやも知れず、噂が立つと）、いとうたてあるものなれば（実に面倒で）、右大将は、常陸守の娘をなむよばふなるなども（右大将は常陸守の娘に夜這いしているようだなどと）、とりなしてむをや（言い立てるだろう）。その守の主（そのかんのぬし、その父親の守は）、いと荒々しげなめり（とても乱暴者というではないか）」

とのたまへば（と薫大将が上機嫌で軽口を叩きなさると）、うち笑ひて（弁尼は愛想笑いをして）、*いとほしと思ふ（薫殿の拘り癖が実父の故衛門督に似ていると、成り行きに不安を覚えます）。*「いとほし」は＜気懸かりだ＞という問題意識が基本で、その困難な事情を抱える人が＜気の毒だ。可哀想だ。＞と思えたり＜愛しい。不憫だ。＞と思えたりする事がある、という語かと思う。ところで、此処での「とおもふ」という言い方は＜きこゆ＞などの敬語遣いがないので、薫殿に対しての思いではないのだろう。では、面倒を引き受けた自分のことを哀れんでいるのかと言えば、そんな湿っぽい場面ではない。この場面は、薫殿がいやにはしゃいでいて、弁尼はそれに付き合っているが、薫がこんな素直な表情を見せるのは弁尼の前だけだ。弁だけが薫の出自を、薫自身と母君の入道宮以外ではだが、だからこそ第三者の立場では唯一、はっきりと知っている人物だ。で、そんな素直な薫の表情を見て弁は改めて思う。薫君同様に眉目秀麗だった故衛門督も、女に持てたが淡白だった。が、変なこだわりを持っていた。目の前の女を率直に愛せば好い物を、それでは飽き足らず、自分なりに物語が構築できる女に拘って、且つその女に振り向いて貰いたくて仕方がない。普段は淡白なくせに、いざとなれば命懸けだ。面倒臭いヤツなのに、放って置けない。だから、この「いとほし」は＜何となく先行きが不安＞なのだろう。

暗うなれば出でたまふ（暗くなったので薫大将殿はお帰りになります）。下草のをかしき花ども（出掛けの足元の美しい花々や）、紅葉など折らせたまひて（紅葉の枝などを従者に折り取らせなさって）、*宮に御覧ぜさせたまふ（妻の女二の宮への手土産に為さいます）。*甲斐なからずおはしぬべけれど（薫殿は女二の宮を抱いてはいらっしゃるらしいが）、かしこまり置きたるさまにて（遠慮がちで）、いたうも馴れきこえたまはずぞあめる（あまり打ち解け申していらっしゃらないようなのです）。内裏より、ただの親めきて（帝から普通の親の様に）、入道の宮にも聞こえたま

へば(姑に当たる叔母の入道宮にも娘を宜しくと頼み申しなさるので)、いとやむごとなき方は(薫殿は女二の宮をとても敬う点に於いては)、限りなく思ひきこえたまへり(このうえなく大事に思い申していらっしゃいました)。*こなたかなたと(そんなわけで薫殿は自邸の三条宮と御所との)、かしづききこえたまふ宮仕ひに添へて(妻と帝にお仕え申しなさる宮仕えに加えて)、むつかしき私の心の添ひたるも(気懸かりな私事の恋心に気を配るのも)、苦しかりけり(大変なのでした)。　*「宮」は＜正室の女二宮＞と注にある。つい以前のように、匂宮への土産かと勘違いした。いや、紛らわしい。ただ、親しい匂宮に「御覧ぜさす」とまでは言わないか。　*「かひなからず」は注に＜女二宮との結婚の甲斐。＞とある。この文は、主語が薫殿で女二の宮ではないらしい。「かひなからずおはしぬ」は＜結婚した意味が無いではなくいらっしゃる＝共寝はしていらっしゃる＞ということだろう。　*「こなたかなた」は注に＜こちら薫の母入道の宮とあちら父帝から大切に後見申される女二宮への奉仕に加えて。薫には女二宮との結婚が「宮仕え」と意識される。＞とある。が、与謝野訳文には＜宮中、院の御所へのお勤め以外にまた一つの役目がふえたように＞とある。私も冷泉院のことは少し気になった。が、此処の文脈では、やはり話題は三条宮邸と御所なのだろう。

［第三段　弁の尼、三条の隠れ家を訪ねる］

*のたまひしまだつとめて(お決めになった日のまだ早朝に)、睦ましく思す*下臈侍一人(信頼に足るとお思いの下級侍一人に)、顔知らぬ*牛飼つくり出でて遣はす(近所に顔を知れていない牛引きで牛車を仕立てて、薫大将は弁尼を迎えに宇治に差し向けなさいます)。　*「のたまひしまだつとめて」は注に＜約束した日の早朝。前に「明後日ばかり」とあった日。＞とある。「つとめて」は＜早めに→早朝時分に＞ということらしい。ただ、「つとめて」には＜その翌朝＞という語用があって紛らわしい。　*「下臈侍(げらふさぶらひ)」は＜下級の侍＞。質素ななりで目立たないから、三条宮邸の従者に見えない、ということなのだろう。　*「うしかひ」は＜牛を世話する者＞だろうが、此処では＜牛を引く者＝牛飼童＞だろう。

「荘の者どもの田舎びたる召し出でつつ(荘園の者の中で田舎者らしいのを呼び出して)、つけよ(供人にさせなさい)」とのたまふ(と薫大将は侍に命じます)。

かならず出づべくのたまへりければ(必ず出て来るようにとの大将の仰せだったので)、いとつつましく苦しけれど(とても気後れして困ったが)、うち化粧じつくろひて乗りぬ(弁尼は身だしなみ身支度をして車に乗りました)。野山のけしきを見るにつけても(都に出る道中の、野山の景色を見るにつけても)、いにしへよりの古事ども思ひ出でられて(弁尼は忘れた筈の若い頃からの俗世の出来事が思い出されて)、眺め暮らしてなむ来着きける(遠くを眺める気分で三条の常陸守別邸に着きました)。いと*つれづれに人目も見えぬ所*なれば(その家はとても物寂しく人の出入りもない所で)、引き入れて(弁は通りから中門まで車を引き入れて)、　*「つれづれ」は＜変化がない→単調だ→地味だ→物寂しい＞みたいなことらしい。　*「なれば」は＜なので＞という条件項をしめす語用が普通だと思うが、此処では「人目も見えぬ(人の出入りもない)」ことが車を「引き入れ」る条件になるという言い方は説得力がないので、この「ば」はその場面の状況説明を示した言い方と読んで置く。

「かくなむ、参り来つる(これこれの者が参りました)」

と、しるべの男して言はせたれば(と先導の者から名乗らせると)、初瀬の供にありし若人(長谷寺詣でで姫の供をしていた若女房が)、出で来て降ろす(出て来て弁を降ろします)。あやしき

所を眺め暮らし明かすに(姫は仮宿で所在無く日々を送っていたので)、昔語りもしつべき人の来たれば(昔話が出来そうな人が来たので)、うれしくて呼び入れたまひて(嬉しくて弁を部屋に呼び入れなさって)、*親と聞こえける人の御あたりの人と思ふに(父親と思い申した故八宮の御側仕えした人と弁を思うので)、睦ましきなるべし(親しく思えるようです)。　*「親と聞こえける人の御あたりの人」は注に＜父八宮に近侍した人、弁尼。＞とある。

「あはれに(あなた様を故宮の御息女と、感慨深く)、人知れず見たてまつりしのちよりは(私なりに内心で思い、お会い申しましてからは)、思ひ出できこえぬ折なけれど(忘れ申すことはありませんが)、世の中かばかり思ひたまへ捨てたる身にて(世の中をこうして剃髪申して捨てた身なので)、かの宮にだに参りはべらぬを(二条院にさえ伺っておりませんものを)、この大将殿の(今回は大将殿が)、あやしきまでのたまはせしかば(特別熱心にお使いを御命じなさったので)、思うたまへおこしてなむ(意を決して出て参りました)」

と聞こゆ(と弁尼は申し上げます)。君も乳母も(姫君も乳母も)、*めでたしと見おききこえてし人の御さまなれば(隠れ住んでいた二条院で見掛けて、ご立派と見知り置き申していた大将の御姿なので)、忘れぬさまに*のたまふらむも(弁の話から、大将が姫を忘れていないように求婚なさっているらしいというのも)、あはれなれど(光栄だったが)、にはかに*かく思したばかるらむと(その大将が、急にこのような計画で事を進め為さろうとは)、思ひも寄らず(思い寄りもせず)、　*「めでたしと見おききこえてし人の御さまなれば」は注に＜薫をさす。二条院で拝見した。＞とある。三章三段に匂宮の留守中に薫大将が、姫一行が居た二条院を訪れていた。　*「のたまふらむも」の「らむ」は背景推量の助動詞「らむ」の連体形で＜～らしいということ＞という言い方だ。　*「かく思したばかるらむ」は注に＜「かく」は以下の薫の来訪をさす。＞とある。が、この校訂で下文の内容を「かく」と読むことは不可能だ。が、この「かく」を＜弁尼の来訪＞と読むとすると、「たばかる」と「らむ」の語用が意味不明だ。だから、「かく」は以下の薫の来訪をさす、ものとして読もうとすると、「思ひも寄らず」で句点を打ち、此処を文末として、以下を段替えするというこの校訂を疑問視せざるを得ない。この「思ひも寄らず」は読点で下文に続く構文であり、それどころか、直接「さにやあらむと思へど」に繋がっているのであり、「宵うち過ぐるほどに～門忍びやかにうちたたく」は重要な場面説明の描写だが、構文上は挿入句として読まないと、此処だけではなく以下の文まで文意が取れない。此処を含めた以下の文で肝要な視点は、弁尼が薫殿の来訪を既知していたか、不知だったのか、という判断で、私には非常に難解だったが、「伊賀専女」の語用がこの計略を承知していた、という意味だと解さないと、以下の文が理解できないと思い知った。その立場で読む。

［第四段　薫、三条の隠れ家の浮舟と逢う］

宵うち過ぐるほどに(宵が少し過ぎて夜に入る頃に)、「宇治より人参れり(宇治から遣いの者です)」とて(と言って誰かが)、門忍びやかにうちたたく(門を静かに叩くのを)、「*さにやあらむ(まさか大将殿ではないだろう)」と思へど(と思ったが)、弁の開けさせたれば(弁が門を開けさせたら)、*車をぞ引き入るなる(何と車が引き入れられて来ました)。「*あやし(遣いにしては変だ)」と思ふに(と思っていると)、　*「さにやあらむ」の「や」は強調なのか反語なのか。強調なら＜そうに違いない＞と予期し得る人の到来と知る言い方で、反語なら＜そんな筈はない＞と不審に思う言い方だ。ところで、この「思へど」の主語は上文から続く構文校訂からして、「君も乳母も」であると知れるので、文意は＜姫君や乳母は思ったが＞であり、「さ」は＜薫大将殿＞を指していて、であれば、この「や」は当然に反語だ。　*「車をぞ引き入る

なる」は注に＜「なる」は伝聞推定の助動詞。浮舟の女房の認知。臨場感ある表現。＞とある。が、是は「さにやあらむ」という予想に反して＜大将殿が来訪したらしい＞と気付いた驚きの表現だろう。　*「あやしと思ふに」は注に＜『完訳』は「使者なら馬が当然なのに、車なので身分の高い人の来訪かと、浮舟づきの女房が不審がる」と注す。＞とある。「あやし」に付いての注釈は有難いが、「思ふ」の主語は文脈からして女房ではなく＜姫と乳母＞だ。「あやし」は＜遣いにしては変だ＞という言い方だろうが、この来訪者が大将だとは気づいているので、実際は＜まさか＞ぐらいの語感かもしれない。

「尼君に、対面賜はらむ(尼君に直接お話ししたい)」

とて(と言って宇治からの遣いという者が)、この近き御庄の預りの名のりをせさせ*たまへれば(山荘近くの薫殿の荘園管理者を従者に名乗らせなさったので)、*戸口にゐざり出でたり(弁は妻戸口に膝を進めました)。　*「たまへれば」の敬語遣いは主語が薫殿である事の明示だが、是は読者に対しての言い方で、姫や乳母や女房たちにはまだ不確かという場面だろう。　*「とぐち」は廂から縁側へ出る妻戸の前だろうが、車は中門から寝殿階下まで乗り入れたのだろうか。全体にこじんまりした印象ではある。

雨すこしうちそそくに(雨は小降りで)、風はいと冷やかに吹き入りて(風がとても冷たく家に吹き込んで)、言ひ知らず薫り来れば(言いようも無い芳香がするので)、「かうなりけり(来訪者は、大将殿だったのだ)」と、誰れも誰れも心ときめきしぬべき御けはひをかしければ(と女房たちの誰もが心ときめかせるほどに薫殿の御姿が美しかったので)、用意もなくあやしきに(客人を迎える用意もなく不都合で)、まだ思ひあへぬほどなれば(また思い掛けない不意の来訪だったので)、心騒ぎて(女房たちは慌てて)、

「いかなることにかあらむ(どういうことになっているんでしょう)」

と言ひあへり(と言い合っていました)。

「心やすき所にて(気楽な場所で)、月ごろの思ひあまることも聞こえさせむとてなむ(この数ヶ月間の私の熱い心情を姫君に申し上げようかと)」

と言はせたまへり(と薫大将は来訪意を従者に言わせなさいました)。

「いかに聞こゆべきことにか(如何お答え申せばよいものか)」と、君は苦しげに思ひてゐたまへれば(と姫君は困っていらっしゃるので)、乳母見苦しがりて(乳母は見かねて)、

「しかおはしましたらむを(こうしてお見えになっていらっしゃるのを)、立ちながらや(お迎えもせずには)、帰したてまつりたまはむ(お帰し申せません)。*かの殿にこそ(本家の奥様に)、かくなむ、と忍びて聞こえめ(これこれと内密にご相談申しましょう)。*近きほどなれば(近くですから、何とかお納め下さるでしょう)」　*「かの殿」は注に＜常陸介邸にいる浮舟母に。＞とある。　*「近きほどなれば」は下に＜よきにはからいたまはむ＞などが省かれているのだろう。注には＜浮舟の三条の隠れ家は常陸介邸に近い距離にある。＞とある。が、常陸守邸の住所は明示されていない。

と言ふ(と言います)。

「*うひうひしく(母君に相談申すなどとは、大人気ない)。などてか、さはあらむ(如何して、そんな必要がありましょう)。若き御どちもの聞こえたまはむは(若い御方同士がお話し合いなさるのは)、ふとしもしみつくべくもあらぬを(その場で深い仲になるものでもありませんのに)。あやしきまで心のどかに(大将殿は珍しいほど心穏やかで)、もの深うおはする君なれば(慎重でいらっしゃる方なので)、よも人の許しなくて(決して姫の許し無しに)、うちとけたまはじ(馴れ馴れしく近付きなさいません)」　*「うひうひし」は＜ものなれない。うぶだ。＞と古語辞典にある。注には、この文に付いて＜以下「うちとけたまはじ」まで、弁尼の詞。『完訳』は「それでは女君が幼い人のようではないか、の気持。以下、今さら母君との相談など不要だとする」と注す。＞とある。が、何よりも、この弁の発言が薫殿がこの夜に来訪するという計画を事前に知っていたことの明示となっていることにこそ、私は注目した。実は此処までの文では、私には弁が薫殿の計略を承知しているのか、いないのか判然とせず、妙に「伊賀専女」の言葉だけが引っ掛かっていたが、この文によって、弁が全て承知の上で橋渡しを引き受けたとはっきり分かった。

など言ふほど(などと弁が言っている内に)、雨やや降り来れば(雨が強くなって)、空はいと暗し(空はとても暗い)。宿直人のあやしき声したる(警備員が粗雑な口調で)、*夜行うちして(夜回りして歩き)、　*「夜行(やぎゃう)」は＜夜回り＞と古語辞典にある。

「家の辰巳の隅の崩れ(家の東南の角が壊れていて)、いと危ふし(とても無用心だ)」
「この、人の御車入るべくは(この誰かの御車は入れるのなら)、引き入れて御門鎖してよ(中に引き入れて御門を閉めてくれ)」
「かかる人の御供人こそ(この御車の供人は)、心はうたてあれ(気が利かない)」

など言ひあへるも(などと言い合っているのも)、*むくむくしく聞きならはぬ心地したまふ(東国訛りが薫殿には乱暴で聞きなれない気が為さいます)。　*「むくむくし」は＜恐ろしい。気味悪い。＞と古語辞典にある。常陸守邸の関東武士たちの東国訛りが薫殿には乱暴に聞こえたのだろう。

「*佐野のわたりに家もあらなくに」　*注に＜薫の口ずさみ。『奥入』は「苦しくも降り来る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」（万葉集巻三、長奥麻呂）を指摘。＞とある。「さののわたり」は大辞泉に＜和歌山県新宮市にあった佐野の渡し場。［歌枕］＞とある。が、この歌の背景は何か。雨が降るのも、家がないのも、佐野の渡し場に限った事でもあるまいに。ざっとウエブで調べた限りでは不明。このままでは歌意が分からないが、歌筋は＜雨で濡れて困る＞だから、此処での引用には間に合う。が、歌意が分からないので、是を引用した意図は分からない。

などロずさびて(などと大将は雨宿りも出来ないと古歌を朗詠して)、里びたる簀子の端つ方に居たまへり(東国武士の声ですっかり田舎気分の簀子の端に座っていらっしゃいました)。

「さしとむる葎やしげき、東屋のあまりほど降る雨そそきかな」(和歌 50-08)

「閉め出しも 楽し東屋 雨そそき」(意訳 50-08)

*注に＜薫の独詠歌。催馬楽「東屋」の歌詞を踏まえる。＞とある。催馬楽「東屋」を小学館日本古典文学全集 25 の臼田甚五郎博士の校注・訳に頼ると、本文は＜(男)「あづまやの(東屋の)まやのあまりの(真屋の余りの)そのあまそそき(その雨注き)われたちぬれぬ(我立ち濡れぬ)とのどひらかせ(殿戸開かせ)」(女)「かすがひも(鎹も)とざしもあ

らばこそ(錠もあらばこそ)そのとのど(その殿戸)われささめ(我鎖さめ)おしひらいてきませ(押し開いて来ませ)われやひとづま(我や人妻)」＞とあり、筋は＜(男)「小屋の軒先の雨宿りで濡れてしまった、戸を開けてくれ」(女)「鍵があるなら掛けて置くけど、開けて入って来なさいよ、余所ん家じゃないんだから」＞だが、「殿戸開かせ」と「我や人妻」の文句が情人への通いを思わせる語感らしく、その色っぽさが宴会を盛上げるという趣向だったらしい。で、当歌だが、「さしとむる」は＜差し止める＞で、「むぐらやしげき」は＜雑草が覆っている＞で、是が「東屋のあまり」の修辞となっているので、前節は＜閉め出された雑草だらけの小屋の軒先で＞で、「あまり」は複意で「あまりほど降る」は＜余りに濡れたほど降る＞で、「雨そそきかな」は＜雨降りだ＞で、催馬楽の情緒で遊んだだけのボヤキ歌なんだろう。

と(と大将が詠歌して)、うち払ひたまへる(雨露を打ち払いなさる)、追風(その追い風が)、いとかたはなるまで(あまりに芳しく)、東の里人も驚きぬべし(東国人たちも驚いたようです)。

とざまかうざまに聞こえ逃れむ方なければ(女房たちは何とも言い逃れようもないので)、南の廂に御座ひきつくろひて(南の廂に御席を用意して)、入れたてまつる(大将を中にお入れ申し上げます)。心やすくしも対面したまはぬを(姫が心易くは対面なさらないのを)、これかれ押し出でたり(女房がどうにか押し出しました)。*遣戸といふもの鎖して(母屋からは引戸に錠を鎖して)、いささか開けたれば(少し開けてあったので)、　*「やりどといふもの」は注に＜遣戸は高貴な人の邸宅では用いない建具。「といふもの」は薫の気持ちに即した叙述。閉めてあった遣戸を少し開けた、という文脈。＞とある。

「飛騨の工も恨めしき隔てかな(飛騨の大工が恨めしい仕切り細工だな)。かかるものの外には、まだ居ならはず(こういう間仕切りの外には、未だ座った事がない)」

と愁へたまひて(と不平を仰って)、*いかがしたまひけむ(どうなさったものか)、入りたまひぬ(薫大将は姫君の部屋に入ってしまいなさいました)。　*「いかがしたまひけむ」は注に＜挿入句。『全集』は「そのいきさつに立ち入らぬ語り手の推量的な叙述」と注す。＞とある。本当に南表側の引戸に鍵が掛かっていたのなら、それを壊して入るのは如何にも乱暴なので、東側からでも回り込んで入ったのだろう。

かの人形の願ひものたまはで(薫大将は姫を故宇治姫の身代わりに欲しいということは仰らず)、ただ(姫本人を)、

「おぼえなき(思いがけずに)、もののはさまより見しより(以前宇治で物陰からあなたを見てから)、すずろに恋しきこと(そわそわと心引かれています)。*さるべきにやあらむ(運命を感じるなあ)、あやしきまでぞ思ひきこゆる(普通とは違う気がする)」　*「さるべきにやあらむ」は注に＜前世からの因縁か、の意。口説きの常套句。＞とある。運命を感じるなあ、なら今でも常套句だ。

とぞ語らひたまふべき(とでも口説きなさるのだろう)。*人のさま(姫の様子は)、いとらうたげにおほどきたれば(とても可愛らしくおっとりしているので)、見劣りもせず(期待通りで)、いとあはれと思しけり(大将はとても愛しく思いなさいました)。　*「人のさま」は注に＜浮舟。相手浮舟の様子、のニュアンス。「女」とはない。＞とある。

［第五段　薫と浮舟、宇治へ出発］

ほどもなう明けぬ心地するに（ほどなく夜も明けそうな気がするが）、鶏などは鳴かで（鶏などは鳴かずに）、*大路近き所に（三条大路も近いこの小家に）、*おぼとれたる声して（間延びした声で）、いかにとか聞きも知らぬ*名のりをして（聞き馴れない品物の名を上げて）、うち群れて行くなどぞ聞こゆる（何種類かの物売りがかたまって通り過ぎてゆくようなものが聞こえます）。かやうの朝ぼらけに見れば（このような夜明け前の暗がりで見れば）、*ものいただきたる者の（頭に品物を載せた行商人が）、「鬼のやうなるぞかし（鬼のように見える）」と聞きたまふも（と女房が言うのをお聞きになるのも）、*かかる蓬のまろ寝にならひたまはぬ心地も（こうした粗末な家でのごろ寝に慣れていらっしゃらない大将には）、をかしくもありけり（興趣ある気分にも思えました）。　*「おほぢちかきところに」は注に＜三条大路に近い隠れ家。＞とある。此処の語り口は夕顔巻四章二段の五条の家の風情に似通う。　*「おぼとる」は＜乱れ広がる＞また＜しまりがない。だらしがない。きちんとしない。＞と古語辞典にある。注には「おぼとれたる声」を＜『完訳』は「間のびした物売りの声」と注す。＞としてある。*「なのり（名告り）」は＜名前を告げること＞で、この語からは御所の夜警が交代時に互いに名乗る名対面（なだいめん）が印象深く思い出されるが、此処では＜売り物の名を呼び上げる声がして。＞と注にある。早朝の大路で大声で名前を言うのは、やはり＜物売り＞のようだ。　*「ものいただきたる者」は＜品物を頭上運搬する行商人＝ヒサメ、イタダキ＞の類のことらしい。今だと、観光用に薪売りの大原女の格好などをするようだが、テレビの東南アジアの取材番組などでは頭上に大きな荷物を載せて運ぶのは普通の日常光景のようだ。　*「かかるむぐらのまろね」は注に＜「蓬」は荒れた邸、「まろ寝」は帯も解かずに寝る旅寝。歌語的表現。＞とある。

宿直人も門開けて*出づる音する（宿直人も門開けて朝の見回りに出て来る音がします）。おのおの入りて臥しなどするを聞きたまひて（その点検作業が無事に終わって侍たちが各自部屋に入って休む物音をお聞きになってから）、人召して（大将は従者を呼んで）、車妻戸に寄せさせたまふ（車を妻戸口に寄せさせなさいます）。　*「いづ」は＜出て行く→帰る＞でもあり＜現れる→業務を始める＞でもある。が、此処での語用の意味が私には分からない。「音する」とあるので＜外回りの点検に出歩く＞ようでもあり、殿居したということは自宅から通っている侍なのだろうから非番明けで自宅に＜帰る＞のかとも思える。分かり難いが、次に「おのおの入りて臥しなどする」の主語も「宿直人」のようなので、この「音する」と「おのおの」の間で＜その間の時間経過を待つ大将の気分＞を読み取るべきだとすれば、やはり「出づ」は＜朝の点検に見回る＞という意味なのだろう。

かき抱きて乗せたまひつ（薫大将は姫を抱き上げて車に乗せなさったのです）。誰れも誰れも（女房たちの誰もが）、あやしう（大変で）、あへなきことを思ひ騒ぎて（困ったことと思い騒いで）、「かきいだきて」は注に＜薫は浮舟を牛車に。＞とある。この場面は夕顔巻四章二段・三段の他に、若紫巻三章三段の若紫を光君が二条院に浚う劇的な誘拐事件を思い出させる。

「*九月にもありけるを（忌月の九月でもありますのに）。心憂のわざや（結婚の為に姫をお連れに為さろうというのは、不吉です）。いかにしつることぞ（何と乱暴な）」　*「くぐわち」は注に＜九月は季の末なので、結婚は忌まれた。＞とある。

と嘆けば（と乳母が訴えると）、尼君も（弁の尼君も）、

「*いといとほしく(本当に大変な事で)、思ひの外なることどもなれど(驚きましたが)、おのづから思すやうあらむ(殿には御考えがあってのことでしょう)。うしろめたうな思ひたまひそ(心配なさいますな)。*長月は、明日こそ節分と聞きしか(今年の九月は明日が忌月の晩秋になる寒露と聞いています)」　*「いといとほしく思ひの外なることどもなれど」は地文として渋谷校訂されているが、下に「長月は明日こそ節分と聞きしか」とあることから、弁にとってこの連れ去りは「思ひの外なることども」ではなかったのだから、私は発言文と見做したい。即ち、此処にある「せちぶん」は「寒露」のことらしく、この日までは仲秋で限々忌月の晩秋に掛からないことから、一昨日に薫殿が宇治で「明後日ばかり車たてまつらむ」(六章二段)と言った時点で、この日に薫殿が姫を連れ去る計画が仕組まれたもので、その薫殿の話を弁はよくよく承知の上で「さらば承りぬ」(同)と引き受けていたのである。　*「ながつきはあすこそせちぶんとききし」は暦がそうなっているという言い方だろうが、弁がそれを意識したのは正に薫殿がこの計略を打ち明けた一昨日に違いない。

と言ひ慰む(と言って乳母を慰めます)。*今日は、十三日なりけり(今日は十三日なのでした)。*「けふはじふさんにちなりけり」は多分、二段で薫殿が言った「明後日ばかり車たてまつらむ」に始まったこの姫君連れ去り作戦談の、当時の読者たちに対するオチだ。

尼君(弁尼は)、

「こたみは(私は今は)、え参らじ(付き添って参れません)。宮の上(二条院の御方が)、聞こし召さむこともあるに(私の上京を御耳になさるでしょうに)、忍びて行き帰りはべらむも(素通り申すわけには)、いとうたてなむ(とても参りません)」

と聞こゆれど(と申すが)、まだきこのことを聞かせたてまつらむも(大将はまだこの時点で二条院の御方にこの姫を連れ去る事情をお知り頂くのは)、心恥づかしくおぼえたまひて(気恥ずかしく思えなさって)、

「それは、のちにも罪さり申したまひてむ(それは後で謝って下さい)。かしこもしるべなくては(これから行く先もあなたが居ないと)、たづきなき所を(頼りないところなので)」

と責めてのたまふ(と弁に同行を強要なさいます)。

「人一人や(誰か一人)、はべるべき(付き添いを)」

とのたまへば(と大将が仰ると)、この君に添ひたる*侍従と乗りぬ(姫にいつも付き添う侍従という女房と一緒に弁も車に乗ります)。乳母、尼君の供なりし童などもおくれて(乳母や弁尼の供をして来た童女なども取り残されて)、いと*あやしき心地してゐたり(本当にキツネに抓まれた気分でした)。　*「じじゅう」は注に＜浮舟付きの女房。初出。＞とある。が、宇治に同道した乳母の他にもう一人居た若女房なのではないか。此処で弁を出迎えたのも、この女房だろう。むしろ、今まで名無しだったことの方が歯がゆい。　*「あやしきここち」は伊賀専女を受けた言い回しと読んで置く。

［第六段　薫と浮舟の宇治への道行き］

「*近きほどにや(近くに行くのだろう)」と思へば(と侍従は思ったが)、宇治へおはするなりけり(大将は宇治へいらっしゃるのでした)。*牛などひき替ふべき心まうけしたまへりけり(途中で牛を取り替える用意までしていらっしゃったのです)。*河原過ぎ、法性寺のわたりおはしますに、夜は明け果てぬ(賀茂の河原を過ぎて、九条の法性寺あたりに差し掛かりなさる頃に、夜はすっかり明けました)。　*「近きほどにやと思へば」は注に＜浮舟や侍従などの気持ち。＞とある。が、下に「若き人は」と文が続くので、語り手の語調を思えば、この「思ふ」の主語は＜侍従＞であり、その侍従の目線で語られる道中描写と読みたい。　*「牛などひき替ふべき心まうけしたまへりけり」は宇治までの長距離なら普通のことかもしれないが、それを敢えて語る「したまへりけり」には驚きが表現されているのだろう。確かに姫も驚いただろうが、姫の動転はあたりを冷静に見回すことも出来ないほどのもので、やはりこの描写は侍従目線だろう。　*「かはらすぎ、ほふしゃうじのわたり」は注に＜加茂河原を過ぎ、九条河原の法性寺付近。現在の東福寺あたり。＞とある。今の東福寺は後世の建立だが、敷地や寺院様式に当事が偲べるというのが、この物語の、というかこの物語が今に伝わることの、凄さかも知れない。

若き人は(若女房の侍従は)、いとほのかに見たてまつりて(薫大将をほんの少し拝し申しては)、めできこえて(素晴らしく思い申して)、すずろに恋ひたてまつるに(そわそわと恋しく思い申し上げるので)、世の中のつつましさもおぼえず(この大将の強引な姫の連れ去りに同道していても、世間体の悪さを感じないのです)。

君ぞいとあさましきに(姫君の方はひどく動揺して)、ものもおぼえでうつぶし臥したるを(わけも分からず力無くうずくまっているのを)、「石高きわたりは(石の多い山道は)、苦しきものを(大変だから)」とて、抱きたまへり(と言って、大将が抱き上げなさいました)。

*羅の細長を、車の中に引き隔てたれば(薄織の細長い布を車中の前後の仕切りにしてあったので)、はなやかにさし出でたる朝日影に(明るく差し込む朝日で丸見えの姿を)、尼君はいとはしたなくおぼゆるにつけて(弁尼はとても極まり悪く思われるにつけても)、「故姫君の御供にこそ、かやうにても見たてまつりつべかりしか(故姫君の御供として、このような光景を見たいものだった)。あり経れば(長生きすると)、思ひかけぬことをも見るかな(思いも掛けぬ目に遭うものだ)」と、悲しうおぼえて(と悲しくなって)、包むとすれど、うちひそみつつ泣くを(我慢しようとするが、眉をひそめて泣くのを)、侍従はいと憎く(侍従はとても不快で)、「ものの初めに*形異にて乗り添ひたるをだに思ふに(御目出度い旅立ちに尼僧姿で同乗している事でさえ縁起でもないと思うのに)、なぞ、かく*いやめなる(何をそう陰気臭くして)」と、憎くをこにも思ふ(と厭で愚かしいとも思います)。老いたる者は、すずろに涙もろにあるものぞと(老人はとにかく涙もろいものだと)、*おろそかにうち思ふなりけり(簡単に考えていたようです)。　*「らのほそなが」は＜薄い織物の細長い布＞で、今ならレースのカーテン風なもの、だろうか。　*「かたちことにて」は注に＜尼姿をいう。＞とある。　*「いやむ」は「いなむ(否む)」の転で＜厭わしく思う。いやがる。きらう。＞と古語辞典にある。*「おろそかに」は＜簡素に＞で、これは弁尼のことを＜見下げる＞のではなく、事情を知らないから＜うわべだけを簡単に考える＞という言い方なのだろう。注には＜三光院は「侍従か心を察してかけり」と指摘。『集成』は「草子地」。『完訳』は「弁の複雑な心中を理解しえぬとする」と注す。＞とある。薫殿と故宇治姉君とのこと、も然り乍ら、薫の出生事情、薫が八宮に傾倒したこと、などの縁や経緯を非常に深く知る弁に、侍従などが近づき得る

はずも無い。また。近付いてはならない。が、この侍従は可愛い。主人の常陸姫の幸せを素直に喜んでいる。どこか、末摘の乳母子だった侍従の君に似通う逞しい生活感があって好感する。

*君も(薫君も)、*見る人は憎からねど(抱いている常陸姫は愛しかったが)、空のけしきにつけても(秋空を見るにつけても)、来し方の恋しさまさりて(故人の姉君への恋しさが増さって)、山深く入るままにも(山深く分け入るにつれて)、霧立ちわたる心地したまふ(霧が立ち上がって目が曇る気がしなさいます)。うち眺めて寄りゐたまへる袖の(そんな気分で席に寄り掛かっていらっしゃる大将の上着の袖が)、*重なりながら長やかに出でたりけるが(抱えている姫の袖と重なりながら車の前簾の裾から長く外に出ていたのが)、川霧に濡れて(宇治川の霧面に濡れて)、*御衣の紅なるに(姫の着物の紅色に)、*御直衣の花の*おどろおどろしう移りたるを(大将の直衣の藍色が移って大きく紫色に変色しているのを)、*落としがけの高き所に見つけて(下り坂の上で見つけて)、引き入れたまふ(中に引き入れなさいます)。　*「君も」は注に＜薫。＞とある。「心地したまふ」の敬語遣いからしても薫殿の主語は分かり易いが、確かに薫殿を「きみ」と呼ぶのは久しぶりの気がする。　*「見る人」は常陸姫を＜抱いている相手＞と言い表しているらしい。で、薫殿を「君」と呼び、姫を「見る人」ということで表現する関係性は夫婦関係ではあるのだろうが、姫を「女」や「女君」と呼んだり、薫殿を「男」と呼ぶような閨の場面とは違って、他人の目を感じさせる。それは車中の場面だから当然だろうが、此処で作者が読者に感じさせたい「他人」は＜故姉君＞なのだろう。それは「来し方の恋しさまさりて」と明示されてもいるが、これらの語感を受けとめないと、文字面からは文意が、少なくも私には取り難い。尤も、当時の読者には、わざわざこんなことを言うまでも無く、普通に感じ取れた語感なのだろうが、私はいちいち考えないと分からないので非常に面倒だ。　*「重なりながら」は注に＜薫の直衣の袖と浮舟の袖とが重なって。＞とある。そうなのだろうと思うが、如何にも舌足らずの語り口だ。なぜ＜人の袖と＞とか何とか分かり易く書けないのか。非常に不満だ。　*「おんぞのくれなゐなるに」は姫の着物の紅色。「御衣」を薫殿の着物と見る読み方もあるらしいが、下の歌に「形見ぞと見る」と明示されているので、この「御衣」は姫の着物だ。　*「おおんなほしのはな」は＜大将の袍の花色＞のことらしい。「花色(はないろ)」は＜はなだいろ。薄い藍色。青色。＞と古語辞典にある。　*「おどろおどろしう移りたる」は紅色と藍色が混ざって二藍(ふたあゐ、紫色)に大変色した様子、らしい。明示がないのでどうもはっきりしないが、此処で姫の袖が紫色に変色した事が下の歌詠みに繋がっているようでもあるので、敢えて＜紫色に変色＞と明示補語して置く。　*「落としがけ」は＜下り掛かる所＞らしい。ちょっとジェットコースターの上がり切りを思わせて、今から滑り落ちるような興味半分恐怖半分の妙に宙ぶらりんの気分にさせられる言い方だ。後の展開を暗示するのか、または、次の歌の説明なのか、何か意図のある言い方にみえるが、何を意味するのか今の私には分からない。

「形見ぞと見るにつけては、朝露のところせきまで濡るる袖かな」(和歌 50-09)

「朝露は 袖を形見と 見る涙」(意訳 50-09)

*さて、この歌に特別な情緒はあるのだろうか。「かたみぞとみる」を素直な大将の思いと見れば、「かたみ」が「片身頃」と「形見」に洒落掛けた大喜利になっているようで、そういう他愛無さが下の「心にもあらず(思わず、何気なく)」とある情緒だ、とはいえそうだ。が、上文で袖の変色をわざわざ語ったことを穿てば、「心にもあらず」を＜思いの他に、不意に＞と取ることも出来そうではある。つまり、姫の袖が紫色に変色した事で、薫大将は改めてこの姫の王家血筋を意識する。と、改めて故姉君の義妹であると実感する。となると、この歌の筋は、「形見ぞと見る」のは大将ではなく故姉君(の魂)で、「朝露」は故君の涙だ。と、「濡るる袖」を見て薫大将が思った、という趣きの「かな」

かな。であれば、底辺には「紫のひともとゆゑに武蔵野の草は皆がらあはれとぞ見る」(古今集 867、題知らず、読人知らず)が敷かれているのだろうか。

と、心にもあらず一人ごちたまふを聞きて(と大将殿がふと独り言を仰るのを聞いて)、いとどしぼるばかり(ますます絞れるほどに)、尼君の袖も泣き濡らすを(弁尼が袖を泣き濡らすのを)、若き人(侍従は)、「あやしう見苦しき世かな(妙に重苦しいわね)。心ゆく道に(嬉しい事なのに)、いとむつかしきこと、添ひたる(何だか事情が有るみたい)」心地す(と思います)。

忍びがたげなる鼻すすりを聞きたまひて(弁が涙をすする音を聞きなさって)、我も忍びやかにうちかみて(大将は自分も静かに鼻を噛んで)、「いかが思ふらむ(どんな気分でいるのだろうか)」といとほしければ(と姫が気になって)、

「あまたの年ごろ(もう何年も)、この道を行き交ふたび重なるを思ふに(この道を行き交った多くの回数を思うと)、そこはかとなくものあはれなるかな(今、八宮息女のあなたを連れて宇治へ来るのも、何か因縁めいて感慨深い)。すこし起き上がりて、この山の色も見たまへ(少し起き上がって、この山の景色を御覧なさい)。いと埋れたりや(ずっとうつむいているじゃないか)」

と、しひてかき起こしたまへば(と姫を敢えて抱き起こしなさると)、*をかしきほどに(可愛らしく)、さし隠して(扇で顔を隠して)、つつましげに見出だしたるまみなどは(そっと開いて外を見る目元などは)、いとよく思ひ出でらるれど(とてもよく故姉君に似て、その面影が思い出されるが)、*おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ(従順であまりに所作が稚拙過ぎるのが)、*心もとなかめる(少し物足りなさげです)。　*「をかしきほど」は＜良い風情で＞とも読めそうだが、下文の「おほどき過ぐ」との整合性から＜可愛らしく＞という言い方と取って置く。　*「おいらか」は＜物静か。穏やか。素直なさま。＞と古語辞典にある。ここでは＜従順＞くらいに取って置く。「おほどく」は＜おっとりしている。うちくつろぐ。＞と古語辞典にあり、「おほどき過ぐ」は＜くつろぎ過ぎる→呑気に過ぎる→安心し切っている→緊張感が無い→油断している＞という言い方にも見えるが、下文の「用意の浅からず」を＜用心深い＞性格と見るよりも＜たしなみ深い＞所作と見た方が分かり易いので、その筋でこの「おほどき過ぐ」を解せば＜稚拙な無造作＞という身のこなしだろうか。　*「こころもとなし」は＜頼りない＞。薫殿が常陸姫に王家様式を期待していることを示す文だろうか。と、ずっと半疑問のノートが続くが、それは取りも直さず、この本文が非常に語意が紛らわしい語用の連続で厄介な難文だからだ。

「いといたう児めいたるものから(故姉君はとても子供っぽく無邪気だったものの)、*用意の浅からずものしたまひしはや(王家らしい行儀作法の心得はしっかり身に付けていらっしゃったものだ)」と、なほ*行く方なき悲しさは(と尚も収まらない大将の悲しみは)、むなしき空にも満ちぬべかめり(虚空を満たすようにいっそう増しているようです)。　*「用意の浅からず」は＜用心深い＞と読むのが現代語に近い語感だが、どうもそれだと文意が面倒なので、此処では＜行儀作法がしっかりしている＞という意味に取って置く。勇み足気味かとは思うが、意味を際立たせる為に＜王家風＞という語を補語して置く。　*「ゆくかたなきかなしさ」は注に＜『源氏釈』は「我が恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」（古今集恋一、四八八、読人しらず）を指摘。＞とある。確かにこの歌を下敷きにした言い方のようだが、歌の方は＜届かぬ思いに遣る瀬無い恋心＞のようで、それでも思いが募る辛さを詠んでいるのだろうが、此処にある「行く方なき悲しさ」は＜故人への執着＞で、それがいっそう募るとは始末が悪い。

［第七段　宇治に到着、薫、京に手紙を書く］

おはし着きて（大将は山荘にお着きになって）、

「あはれ（ああこんな気持ちになるなんて）、亡き魂や宿りて*見たまふらむ（亡き姉君の魂がこの山荘に宿って、私が義妹を此処に引き入れるのを見て責めていらっしゃるのだろうか）。誰によりて（誰の所為で）、かくすずろに惑ひありくものにもあらなくに（私がこんなにあてなくさまよい歩く事になっているのかというのに）」　*「見たまふらむ」は＜見守りなさる＞ではあるのかもしれないが、それは「宿りて」なのだから、故姉君は山荘を見守るのであって、薫君を見守るのではない。いや、むしろ他人を連れ込む薫君を家を守る立場から監視し非難する、ように薫殿には思えた、のだろう。

と思ひ続けたまひて（と思い続けなさって）、降りてはすこし*心しらひて（降車すると少し故君の御霊に気兼ねなさって）、*立ち去りたまへり（姫の側を離れなさいました）。　*「こころしらふ」は＜気遣う＞ではあるようだが、相手を思い遣る、配慮する、という語感とは少し違って、「あしらふ」に類するその場の取り繕い、宥めすかし、言い逃れ、手懐け、のような処世法を意味するようだ。悪く言えば＜ごまかす＞に近い。　*「立ち去る」は＜その場を離れる＞。此処では日立姫の側を離れる。

*女は（此処で大将の女として暮らすことを知った姫は）、母君の思ひたまはむことなど（無断になってしまった母君が心配なさることを）、いと嘆かしけれど（とても悲しく思ったが）、艶なるさまに（大将が優しく）、心深くあはれに語らひたまふに（思い遣りを持って心配ないとお話しなさるので）、思ひ慰めて降りぬ（慰められて下車しました）。　*「をんな」は注に＜浮舟。「女」という呼称に注意。＞とある。確かに、姫をこう呼称することで作者は話題対象の人物が夫婦であることや、その関係性に基づく場面や舞台の設定を示しているようだが、閨での濡れ場なら男女の姿態が示されていると読み易いが、此処での語用のように＜結婚を自覚した姫＞を言うような場合は、作者が便利に使うほどには、読者は、少なくも私は語意の把握が容易ではない。

尼君は、*ことさらに降りで、廊にぞ寄するを（弁尼は寝殿で降りずにわざわざ自室に近い廊下に車を付けて下車するのを）、「*わざと思ふべき住まひにもあらぬを（いやに他人行儀な）、用意こそあまりなれ（遠慮が過ぎる）」と見たまふ（と大将はお思いになります）。　*「ことさらに降りで廊にぞ寄する」は注に＜『完訳』は「薫や浮舟は寝殿の正面に下車、弁は自分の住む廊に車を回す」と注す。＞とある。従って補語する。　*「わざと思ふ」は「住まひにもあらぬ」という価値観による判断らしいので＜格式・形式張る＞で、その「形式・様式」は＜主従のけじめ＞だろうか。しかし、侍従は降りたのだろうから、むしろ尼僧が晴れの舞台に不似合いと遠慮したのか。となると、この「住まひ」は＜建築格式＞ではなく＜住まい方←親しい間柄＞を意味しているのかも知れない。が、それは薫殿が弁を身内以上に事情を知る者と気を許しているからで、傍目には、侍従が思うように煙たく見える存在なのだろう。ただ、弁がこの強引な計画に加担できたのは、薫殿の出生事情を知っていることと同時に、常陸姫も弁の遠縁の娘に当たるという身内意識の気安さはあったのだろう。

御荘より（近くの大将の荘園から）、例の、人びと騒がしきまで参り集まる（いつものように、手伝いの者どもが騒がしいほど多数参集します）。*女の御台は（新婦の御食事は）、尼君の方より参る（尼君の台所で調理します）。道は茂かりつれど（宇治への山道は険しかったが）、このありさまは（この山荘の晴れやかさは）、いと晴れ晴れし（実に見事なのでした）。　*「をんなのみだい」は＜

新婦の御食事＞のことらしいが、では大将の食事はどういうものだったのか。此処で是を言う意図は当時の実情を知る女房たちの常識を前提に、何か際立ったことを言っているのだろうとは思うが、私にはその全てが分からない。

川のけしきも山の色も（川の風情も山の紅葉も）、もてはやしたる造りざまを見出だして（楽しめる庭園造りになっているのを見つけて）、日ごろのいぶせさ（隠れ住んでいた日々の鬱積も）、慰みぬる心地すれど（晴れる気がするが）、「いかにもてないたまはむとするにか（大将は私を如何処遇するお心算か）」と、*浮きてあやしうおぼゆ（と姫は頼りなく不安を覚えます）。　*「浮く」は＜浮かぶ＞で、地に足が着かない不安定な状態。身も心も＜軽い状態＞だから、新たな展開が期待できる、とも言えそうだが、吹けば飛ぶような頼りなさ、でもありそうだ。

殿は、京に御文書きたまふ（大将殿は京に御手紙を書きなさいます）。

「なりあはぬ仏の御飾りなど見たまへおきて（仕上がっていない仏間の出来栄えを調べようと存じまして）、今日吉ろしき日なりければ（今日が吉日なので）、急ぎものしはべりて（急いで宇治に来たものですから）、乱り心地の悩ましきに（とても疲れまして）、物忌なりけるを思ひたまへ出でてなむ（謹慎日であったことを思い出しましたので）、今日明日ここにて慎みはべるべき（今日明日は此処に籠もろうと思います）」

など、母宮にも姫宮にも聞こえたまふ（など母宮にも正妻の姫宮にも差し出しなさいます）。

［第八段　薫、浮舟の今後を思案す］

うちとけたる御ありさま（薫殿の部屋着に着替えて寛いだ御姿は）、今すこしをかしくて入りおはしたるも恥づかしけれど（いっそう優美で部屋に入って来られるのも姫は気が引けたが）、もて隠すべくもあらで*居たまへり（隠れる仕切りも無しに座していらっしゃいます）。　*「居たまへり」の主語は姫だろうが、敬語遣いになっている。大将夫人の地位に就いたことを示すのだろうか。

女の装束など（新婦の服装は）、*色々にきよくと思ひてし重ねたれど（守夫人が色々と美しくさせようと思って重ね着せてあるようだが）、すこし田舎びたることもうち混じりてぞ（少し田舎じみた所があって）、昔のいと萎えばみたりし御姿の（故姉君の普段着姿が）、あてになまめかしかりしのみ思ひ出でられて（上品で風情があったことばかりが思い出されて）、　*「色々にきよくと思ひてし重ねたれど」は注に＜主語は浮舟の母。その思い入れが窺える。＞とある。確かに分かり難い。

「髪の裾のをかしげさなどは（髪の端の美しさは）、こまごまとあてなり（この姫も豊かで上品だ）。*宮の御髪のいみじくめでたきにも劣るまじかりけり（嫁宮の御髪の非常な美しさにも劣らないだろう）」　*「宮」は注に＜薫の正室、女二宮。＞とある。女二の宮の分かり難さは、三条宮邸での暮らしぶりが全く語られていないことに、その多くが起因すると思えてならない。要するに、この内親王に付いての記事があまりにも少なく、馴染みが薄い。にも関わらず、此処で当たり前のように「宮」と語られることに違和感を覚えるのは私だけだろうか。

と見たまふ（とお思いになります）。かつは（そして）、

「この人をいかにもてなしてあらせむとすらむ(この人を如何処遇すれば良いのだろう)。ただ今(今すぐに)、ものものしげにて(妻の格式で)、かの宮に迎へ据ゑむも(三条宮邸へ迎え入れるというのも)、音聞き便なかるべし(外聞が悪い)。さりとて、これかれある列にて(さりとて、大勢居る女房の一人として)、おほぞうに交じらはせむは本意なからむ(大雑把に処遇するのは、故君を大事に思う自分の意に沿わない)。しばし、ここに隠してあらむ(暫く此処に隠れ住まわせることにしよう)」

と思ふも(と思うものの)、見ずはさうざうしかるべく(この遠い宇治ではなかなか会えないのが寂しく)、あはれにおぼえたまへば(悲しく思えなさるので)、おろかならず語らひ暮らしたまふ(薫殿は姫にじっくりと話し聞かせてその日を過ごしなさいます)。故宮の御こともたまひ出でて(姫の実父である故八宮の話も話し聞かせて)、昔物語をかしうこまやかに言ひ戯れたまへど(思い出話を楽しく詳しくして冗談も仰るが)、ただいとつつましげにて(姫はただとてもおとなしく)、ひたみちに恥ぢたるを(ひたすら恥ずかしがるのを)、さうざうしう思す(薫殿は物足りなくお思いになります)。

「あやまりても(不備があっても)、かう心もとなきはいとよし(このように未熟なのは構わない)。教へつつも見てむ(教えて育てれば良い)。田舎びたるされ心もてつけて(田舎臭さが身に着いて)、品々しからず(下品で)、はやりかならましかば(軽薄だったら)、形代不用ならまし(かたしろふようならまし、故姉君の身代わりにはならなかった)」

と思ひ直したまふ(と思い直し為さいます)。

[第九段　薫と浮舟、琴を調べて語らう]

ここにありける*琴(山荘にあった古琴や)、箏の琴召し出でて(十三絃を持ち出させなさって)、「かかることはた(楽器の嗜みなどは)、ましてえせじかし(この姫はとてもしないのだろうなあ)」と、口惜しければ(と残念だったが)、一人調べて(薫殿は一人で鳴らして)、　*「琴」は「きん」と読みがある。七弦古琴だ。

「宮亡せたまひてのち(八宮が亡くなってからは)、ここにてかかるものに(ここではこういうものに)、いと久しう手触れざりつかし(ずいぶん久しく手を付けなかったものだ)」

と、めづらしく我ながらおぼえて(と自分でも珍しがって)、いとなつかしくまさぐりつつ眺めたまふに(とても懐かしく弾きながら情緒に浸っていらっしゃると)、月さし出でぬ(月が出て来ました)。

「宮の*御琴の音の(八宮の御古琴の音は)、*おどろおどろしくはあらで(控え目で)、いとをかしくあはれに弾きたまひしはや(風情良く情感込めてお弾きになっていたな)」　*「御琴」は「おおんきん」と読みがある。古琴だ。　*「おどろおどろし」は＜ぎょうぎょうしい。おおげさだ。＞と古語辞典にある。古琴は元々文人が自身で情緒を楽しんで奏でた楽器らしく、儀式で意識統一を図ったり宴席を盛上げる為に鳴らす派手な楽器ではないので、音楽の基本概念を思索する作曲用の道具にも思え、楽器自体の性能としても＜押し出しのない受身＞を旨に造られていたのかも知れない。

と思し出でて(と思い出しなさって)、

「昔、*誰れも誰れもおはせし世に(昔、八宮や姉君のご存命中に)、ここに生ひ出でたまへらましかば(あなたが此処でお育ちになっていたら)、今すこしあはれはまさりなまし(もう少し私の話や琴の音に感慨も深いのでしょうが)。*親王の御ありさまは(桐壺帝代の親王でいらっしゃった八宮の御人柄は)、*よその人だに(他家の私でさえ)、あはれに恋しくこそ(懐かしく恋しく)、思ひ出でられたまへ(思い出されます)。などて(どうしてあなたは)、*さる所には(東国などという遠方で)、年ごろ経たまひしぞ(長年お暮らしなさることになったのか)」　*「たれもたれも」は初宮と姉君だろう。北の方は京で亡くなっていてこの宇治山荘に住んでいないし、そも他人だ。とはいえ、母の守夫人の叔母だから常陸姫にとっても大叔母くらいにはなるだろうが。　*「親王(みこ)」と八宮を言うのは、桐壺帝の御子であった由緒の強調、だろうかと明示補語して置く。　*「よその人だに」は注に＜『集成』は「他人の私でさえ」と訳す。＞とある。が、薫殿は光君の子であり、八宮は光君の弟宮だから、叔父甥の関係であり、相当に近い血縁だ。が、それは表向きの関係性で、実は薫殿は故藤原衛門督と女三の宮との間の子だ。が、女三の宮は朱雀院の内親王で、当然に朱雀院は八宮の兄宮だから、実質でも八宮は薫殿の大叔父だ。だから、この「よその人」を＜他人＞というのはちょっと遠過ぎて＜他家の私＞というべきだろう。　*「さる所には」の「は」は限定条件を示す係助詞で＜よりによって、何もそんな＞という強調の語感がありそうだ。ただ、これは姫に答を期待する疑問ではなく、残念な思いを示す言い方だろう。

とのたまへば(と仰ると)、いと恥づかしくて(姫はとても気が引けて)、*白き扇をまさぐりつつ(白い扇を玩びながら)、添ひ臥したるかたはらめ(脇息に寄り掛かっている横顔が)、いと隈なう白うて(扇に映えて真っ白に照り光って)、なまめいたる額髪の隙など(艶のある額のほつれ髪が)、いとよく思ひ出でられてあはれなり(姉君の風情にとてもよく似ていて感慨深い)。まいて(すると尚更)、「かやうのこともつきなからず教へなさばや(楽器のたしなみも姉君に似せて出来るように教えなければ)」と思して(と薫殿はお思いになって)、　*「白き扇」は注に＜『集成』は「骨に白い紙を張った、いはゆる「かはぼり」の扇である。夏扇」と注す。＞とある。これが夏扇であることが、下文で引かれる「和漢朗詠集」の一節を呼び起こす仕込み伏線になっているらしい。が、その漢詩自体を知らない私にはコマセに釣られる事もない。

「これは(この楽器は)、すこしほのめかいたまひたりや(すこしお弾きになりませんか)。*あはれ吾が妻といふ琴は(ああ‘あづま’という名のこの和琴は)、さりとも手ならしたまひけむ(東国育ちのあなたなら、さすがに手に為さっていたでしょう)」　*「あはれわがつまといふことは」は注に＜吾が妻、東琴、すなわち和琴。＞とある。

など問ひたまふ(などお尋ねなさいます)。

「その*大和言葉だに(その和琴を‘あづまごと’と呼ぶ大和言葉さえ)、つきなくならひにければ(聞き慣れていない田舎者ですので)、まして、これは(まして楽器の演奏など、できません)」　*「やまとことば」は注に＜「大和言葉」は和歌の意。和歌さえ知らぬ、まして和琴は知らない、の意。＞とある。

と言ふ(と姫は言います)。いとかたはに心後れたりとは見えず(こうした言葉遊びで受け答えする姫を、そう一概に無教養とも思えず)、ここに置きて(此処に残し置いて)、え思ふままにも

来ざらむことを思すが(思うように会いに来れないとお思いになるのが)、今より苦しきは(今から不自由に思い遣られるということは)、なのめには思さぬなるべし(大将が姫を相当気に入りなさったという事のようです)。琴は押しやりて(薫大将は和琴は横へ押し遣って)、

「*楚王の台の上の夜の琴の声」　*この文句は和漢朗詠集380番の尊敬という人が「題雪」という題で作った「班女閨中秋扇色　楚王台上夜琴声」という七言対句の後半を引いたもの、らしい。で、和漢朗詠ではこの文句を訓読みするらしく、此処でも「そわうのだいのうへのよるのきんのこゑ」と詠唱したらしい。そんなことをして、どんな意味が有るのか私には全く分からない。エリート社交界の贅沢な雰囲気を遊ぶ、という箱庭の情緒は有るのかも知れないが、漢学の知識を自慢しあった軌跡の他に見るべきものはあるのだろうか。「班女(はんじょ)」は＜「班婕妤(はんしょうよ)」のこと＞と大辞泉にある。「班婕妤」は＜中国、前漢の女官。婕妤は官名。成帝に仕えたが、寵を趙飛燕姉妹に奪われた後は、退いて太后に仕えた。「怨歌行」はその時悲しんで作った歌といわれる。班女。＞とある。また、「班女が閨」は＜《班婕妤が帝の愛を失ったとき、わが身をもはや不用となった秋の扇にたとえて詩を作ったという「怨歌行」の故事から》男に捨てられた女の寝室。＞とあり、「秋の扇」は＜《漢の宮女、班婕妤(はんしょうよ)が君寵を失った自分を秋の扇にたとえて詩を作った故事から》男の愛を失って捨てられた女のたとえ。団雪(だんせつ)の扇。＞とある。そして、「団雪の扇」は＜《中国前漢の成帝の愛妃、班婕妤(はんしょうよ)が「怨歌行」で、寵を失ったわが身を、月のように円く雪のように白い扇にたとえたところから》男の愛を失った女、男に顧みられなくなった女のたとえ。秋の扇。秋扇(しゅうせん)。＞とあり、「白き扇」に一回りした。「怨歌行」を関連サイトで雑観したところ＜白い扇は雪のように美しく微風を発するが、涼風立つ季節が来ればお払い箱だ＞みたいな筋のようだ。だから、正に「白き扇」は「班女閨中秋扇色(はんじょけいちゅうしゅうせんしょく)」だったわけだ。で、この前段を受けた後段の「楚王台上夜琴声(そおうだいじょうやきんしょう)」は＜帝が殿上で弾く琴の音が雪の夜に悲しく響く＞と言っていることになりそうだ。が、この後半だけを取り出せば＜帝が殿上で夜に弾く琴の音＞としか言っていないのだから、優雅な風情を言っているように聞こえるのかも知れない。で、正に此処の場面でも、姫や侍従は漢詩の素養がないらしく、この漢文の前半を知らないので、薫殿の詠唱を優雅さと勘違いした、という設定になっているらしい。弥に凝った仕掛けで、この漢文素養が当時の京女房の流行で地方女房の羨望の的だったのなら、この記事は世相の期待に応えているのだろうが、もし作者の知識のひけらかしだとしたら、この作者は相当な反感を買ったのではないかと、全く余計な心配をするほどの「白き扇」のコマセ方に見える。が、この物語が女房連中に人気があって、今日にまで語り継がれていることからしても、仮にヒケラカシの漢文解説の講義風であったとしても、鼻持ちならない文体ではないので親しめて、教養が身に付くと歓迎されていたのかも知れない。

と誦じたまへるも(と、不吉な文句を口ずさみなさるが)、かの弓をのみ引くあたりにならひて(なにしろ弓ばかり引く武芸一辺倒の東国育ちなもので、大将のこの教養溢れる雅な詩吟を)、「*いとめでたく(とても素晴らしく)、思ふやうなり(夢見ていたような王朝情緒だ)」と、侍従も聞きゐたりけり(と、侍従まで聞き入っていたのです)。さるは(しかし)、扇の色も心おきつべき*閨のいにしへをば知らねば(姫は手にする扇の色の白さに、この漢詩の前半が班女が閨中で怨み節を吟じた不幸を取り上げている、という故事との関連を気付かないので)、ひとへにめできこゆるぞ(偏に感心し申すというのは)、後れたるなめるかし(不覚を取ったのかも知れません)。「ことこそあれ(事もあろうに)、あやしくも、言ひつるかな(変なことを言ってしまったものだ)」と思す(と薫殿はお思いになります)。　*「いとめでたく思ふやうなり」は注に＜侍従の感想。薫の口ずさんだ詩句の内容を理解せず、美声に感嘆している。＞とある。　*「ねやのいにしへ」は注に＜『万水一露』は「草子の詞也」と指摘。『集成』は「今、浮舟は「白き扇をまさぐりつつ」あるので、不吉な符号に気づくべきなのである。以下、草子地」と注す。＞とある。

尼君の方より(弁尼から)、くだもの参れり(果物が差し入れられました)。箱の蓋に、紅葉、*蔦など折り敷きて(箱の蓋に紅葉や蔦を台に敷いて)、ゆゑゆゑなからず取りまぜて(風情良く盛り付けてあって)、敷きたる紙に(下敷き紙に)、*ふつつかに書きたるもの(太い字で書いてあるものを)、隈なき月にふと見ゆれば(明るい月明かりでふと目にして)、目とどめたまふほどに(大将が目を止めていらっしゃると)、*くだもの急ぎにぞ見えける(果物を待っていらっしゃったような格好に見えました)。　*「つた」を持ち出すのは普通の事なのか。普通の秋の風情なのかもしれないが、少なくも此処では下にある歌の「宿り木」の枕ではありそうだ。　*「ふつつかに書きたる」は注に＜『集成』は「筆太に書いてあるのが。老人らしい太い字」と注す。＞とある。　*「くだもの急ぎ」は注に＜『一葉抄』は「双紙地也」と指摘。『評釈』は「字を読み解こうとして、のぞきこむ薫を、「くだものいそぎにぞ見えける」とひやかす」。『集成』は「まるで、くだものを早く欲しがっているように見えた。たわむれに取りなした草子地」と注す。＞とある。此処に来て、またぞろ、聞き慣れない女房言葉やら言い回しが多く、注釈無しには読み進めない難文が続く。

「宿り木は色変はりぬる秋なれど、昔おぼえて澄める月かな」(和歌 50-10)

「宿り木が 住めば目出度い 秋の月」(意訳 50-10)

*注に＜弁尼から薫への贈歌。『集成』は「上の句、大君から浮舟に変ったことを暗に言い、月を薫に喩える。「澄める」に「住める」の意を掛ける。去年の秋の、「宿木」を詠み込んだ薫との贈答を踏まえたもの」と注す。＞とある。「宿り木は色変はりぬる」は果物の下に敷いた蔦の枯れ茎に掛けている、というか、この歌のために枯れ茎を敷いた、という趣向らしい。因みに＜去年の秋の「宿木」を詠み込んだ薫との贈答＞は宿木巻七章五段の、「宿り木と思ひ出でずは、木のもとの旅寝もいかにさびしからまし」(和歌 49-16)という贈歌というより独詠歌の形で薫君が詠んだものに、「荒れ果つる朽木のもとを宿りきと、思ひおきけるほどの悲しさ」(和歌 49-17)と弁が返歌ではなく唱和したもの、のことのようだ。だから、その意味では＜上の句、大君から浮舟に変ったことを暗に言い＞というのも、むしろ＜御方から常陸姫に殿の常緑青春の恋愛対象は変わった＞というべきかもしれない。そして、その恋愛大将が御方であれ常陸姫であれ、「昔(故姉君)」を「おぼえて(偲んで)」「澄める月(気が晴れた大将)」「かな(といったところでしょうか)」くらいの軽口と取って置く。

と古めかしく書きたるを(婆臭く書いてあるのを)、恥づかしくもあはれにも思されて(姫の手前のネタバレが極まり悪くも、急所を押さえた勘所を感心にも思いなさって)、

「里の名も昔ながらに、見し人の面変はりせる閨の月影」(和歌 50-11)

「少しだけ 違って見える 今日の月」(意訳 50-11)

*この歌の見所は注釈には特に示されていないが、「里の名も」が＜宇治＞に掛けた＜憂し、という気持も＞という洒落語用であること、にあるらしい。この指摘は、以前からよく参照させて貰っている＜「源氏物語」ウエブ書き下ろし劇場＞サイトの当該ページ当該箇所に示されていた。また私の感想では、「宇治」は「うじ」ではなく「うぢ」なので「憂し」には「う」しか掛かっていないが、「里の名」という言い方をすることで「うぢ」の「ぢ」が地名の「地」で、「うぢ」が＜辛い思いのある土地＞を示すという理屈オチにもなっていて、サロン受けの良さそうな詠みっぷり、だったような気もする。で、この場面だが、弁が＜故姉君に似た人が居て良かったですね、是で少しは気晴らしになったでしょ＞と戯れ気味に言い掛けて来た歌に、大将は面と向かって応えるのも照れ臭い。が、気の利いた文句で言い返したくなるし、それが出来ないでは沽券に関わる。で、薫殿は＜いやいや故君を失った悲しみは相変わらず晴れな

いが、今日の寝室に差す月明かりは故人の面影を違う印象に思わせるようだ＞と、いつもとは少しだけ違うと惚けて見せた、みたいなことだろうか。

　わざと返り事とはなくてのたまふ(わざわざ返歌として書き留めることはなしに、大将はこう仰るのを)、侍従なむ伝へけるとぞ(侍従が弁に言い伝えたとのことです)。

(2013 年 11 月 17 日、読了)